

特集

プラス漢方でかゆいところに手が届く！ 皮膚疾患・皮膚トラブル

かゆみ治療：西洋医学と漢方の融合

かゆみは日常生活において頻繁に発生し、患者にとって強い苦痛を伴う皮膚症状の一つである。かゆみにより注意力が散漫になり、しばしば集中力の低下を招く。また睡眠の質が低下し、結果として学業や仕事に悪影響を与える。このかゆみをコントロールすることは重要でありながら難しい課題であり、長年にわたり研究が進められてきた。1910年にヒスタミンが発見され、その後1940年代以降、抗ヒスタミン薬を用いたかゆみ治療が一般的になった。さらに、1990年代には抗脂質メディエーター薬などの新たな治療法も開発された。蕁麻疹などのかゆみにはこれらの薬剤は一定の効果を示したが、アトピー性皮膚炎やその他の皮膚疾患によるかゆみに対しては、その効果は限定的であった。

この10年間で、かゆみのメカニズムに関する研究は飛躍的に進展し、末梢性および中枢性のかゆみのメカニズムが次々と解明されてきた。その結果、かゆみを直接引き起こすサイトカインであるインターロイキン(IL)-31や、アトピー性皮膚炎の発症に関連するIL-4およびIL-13を標的とした抗体製剤が開発された。さらに、かゆみのシグナル伝達経路をブロックするヤヌスキナーゼ(JAK)阻害薬も登場し、かゆみに対する治療が飛躍的に向上した。

とはいえ画期的な新薬が開発されたにもかかわらず、依然として多く

の患者がかゆみに悩まされている。このような場合に漢方薬の使用が期待される。漢方薬には西洋薬にはない独自の効果があり、その生薬成分や化合物の作用機序に関する研究もさかんに行われている。漢方薬のかゆみに対する有効性は、これまで多くの臨床医によって長年使用されてきた実績と経験により証明されている。さらに、2018年に世界保健機関（WHO）が公表した国際疾病分類（ICD-11）の改訂版には伝統医学の項目が新設された。この改訂において、世界中の伝統医学のなかで漢方を含む東洋医学が取り上げられたことは、漢方治療の地位が国際的に確立されたことを示している。

本特集では、「プラス漢方でかゆいところに手が届く！」をテーマに、まず漢方医学および西洋医学の両視点からかゆみの発症メカニズムを解説した。また漢方薬の使用方法について、それぞれの専門家の先生方に詳述していただいた。本特集が薬剤業務の一助となれば幸いである。

富山大学学術研究部医学系 皮膚科学 教授

清水 忠道